

(第一次)の採集品の中にあつた *Usnea pangiana* Stirt. がバルバチン酸含有のものと判明したので此の酸を欠く *U. hondoensis* の方はその亜種に入れて然るべきと思ふ。Motyka は *U. pangiana* Stirt. の記載文で表面の色彩を特に重視して居るが筆者は *U. hondoensis* を記載する時既に葉体下部の太き部分に特に著しい輪裂を指摘した。この点はヒマラヤ産の *U. pangiana* でも同様に最も著しい特兆として数へられるべきものである。尚筆者はヒマラヤ産のみならず日本産のもので有子器の株を若干見出した。尚著者の乾園中にはタイ国産とインドネシア産の *U. pangiana* の標本もあるので本種は東部ヒマラヤ地方から東南アジアの諸地をへて日本に分布する地衣の一つに数へるべきである。

○ 高等植物分布資料 (77): Materials for the distribution of vascular plants in Japan (77)

○ ハナガガン *Quercus hondae* Makino かつて本誌 40:329-335 (1965) に、ハナガガンが四国にも分布していることを報告したがその後愛媛県西南部の御荘町平城の社叢にもあることがわかった。スダジイを優占種としてヤマビワ、イズセンリョウ、ツルコウジ、ホソバカナワラビなどの多い林内に2本あり、胸高直径は 66 cm と 54 cm に達する。

○ オオヤマカタバミ *Oxalis obtriangulata* Maxim. 四国ではまれな植物と思わ



Fig. 1. *Chrysanthemum zawadskii* near Tsuchigoya, Mts. Ishidzuchi.

れ産地もあまり知られていないが、愛媛県では笹が峰にある。海拔 1000 m ならずのところで、林下にオクノカンスゲ (*Carex foliosissima* Fr. Schmidt) とまじって生えている。なお、オクノカンスゲは笹が峰の北面には非常に多いが、稜線ぞいに寒風山、桑瀬峠を経て伊予富士の高知県側にもまれでない。以前は四国には知られていなかったもので、近年岡本 (岡山理科大学紀要 No. 6, 155-170 (1970)) によって報告され、ほかに石鎚山周辺なども産地としてあげられているが、この方面では私はまだ見ておらず、アオバスケが多い。

○イワギク *Chrysanthemum zawadskii* Herbich 隔離分布のいちじるしいキクであるが、四国では以前から高知・愛媛県境の寒風山に知られ、近年高知県鳥形山の石灰岩地でも見出されている。もっとも石鎚山という記録 (高知営林局：四国に於ける植物の分布と其の生態 草本編 (1938)) はあるが、たしかなことがわかっていない。ただ、最近これを裏付けるように、問題の石鎚スカイラインの終点である土小屋近くに生ずることが明らかになった。生育地は海拔 1550-1600 m, 砂岩と泥岩よりなる岩場で、個体数はかなり多い。結晶片岩よりなる寒風山とは基岩を異にするが、所生の植物には共通のものが多く、次のような群落の組成が見られる。

ジョウジョウスゲ 3.3, アキカラマツ 2.2, オオトウヒレン 2.2, イワギク 2.2, シモツケソウ 1.2, ケスゲ +.2, ウメバチソウ +.2, コウヤザサ +, コイワカンスゲ +, ヤマラッキョウ +, コオニユリ +, テバコマンテマ +, ヒメキリンソウ +, イシヅチボウフウ +, ミヤマビャクシン +, ヒメウツギ +, シモツケ +, ニガイチゴ +.

(高知大学教育学部生物学教室 山中二男)

○傾光植物における光と葉との関係 (柳沢新一) Shinichi YANAGISAWA: Relation between the light and leaf in the photonastic plants

傾光植物の花は快晴、晴、薄曇りに開き、曇天、雨天にとじている。勿論夜はとじている。このことから開花は光が作用するものであることが判る。ハコベに覆いをして光を遮断すると開かないでとじている。このことから光が必要なが判る。然しかタバミ、ツメクサ、ハコベ、タンポポ、コオニタビラコ等の花に覆いをして、葉が出る様になると開花が見られる。これは葉に光を受けて、花成ホルモンが葉柄に伝わり、そのため開花するのであると考えられる。尚、ハコベの葉を全部摘葉するととじているが、半数摘葉すると半開となり、無処理区では開花が見られる。これらからも開花は葉が関係するものであることが判る。

(東京都豊島区 [redacted])

ロイトスギトウダイという名称を抹殺する 本誌 46: 316 でイトスギトウダイという名を提唱したが、これは余計な名であることが奥山春季氏の注意でわかったので抹殺する。この植物には帝室博物館天産課編日本植物乾腊標本目録 (1914) に新称としてマツバトウダイの名があり、さらに日本植物総覧の各版にこの名が襲用されているのでそれを有効名とする。

(久内清孝)